愛されているということ

奨励	藤浪 敦子〔ふじなみ・あつこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団牧師

しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

（ガラテヤの信徒への手紙　４章４―７節）

はじめに

昨年の春学期に、京田辺のチャペル・アワーにうかがったので、こうして同志社の講壇に立たせていただくのは、ちょうど１年ぶりになります。この１年の間に、私は初めて出産というものを経験しました。昨年の12月末に息子が生まれ、その子もすくすくと成長して、早くも６カ月になりました。

親になるということ

出産するということ、そして親になるということについて、それぞれにいろいろな思いや願いがあることだと思います。また、女性の場合には、自分が実際に産むという役割を担うことになるので、特別な思いをもっている方も少なくないかもしれません。早くに子どもが欲しいと願う人もあれば、子どもを持たないということもあります。いろいろな願いと共に、時には厳しい決断を求められることもありますが、どの願いも、どんな決断も、その人その人の大切な人生なのだと思います。

私の場合は「いつかは出産するのかな」と漠然と考えることはあっても、子どもが欲しいとか、育てたいという願いは、どちらかというと、あまりないほうでした。また、正直なことを言えば、神学校を卒業して、伝道師、牧師の働きを担うなかで、その歩き始めたレールから一旦離れて、妊娠・出産するということへの不安もありました。ですので、子どもが実際に生まれてくるまでは、自分の生活が変わっていくことへの不安の方が大きくて、親の自覚も、心構えも、あまりできていませんでした。

でも、こうして実際に子どもが生まれて、その小さな命の存在に触れていくと、これはもう、理屈抜きで、我が子を大切に感じ始めている自分がいました。そして気がつけば、もう６カ月以上もの間、当たり前のことではあるのですが、一日も欠かすことなく子育てをしてきてしまっているのですから、親になる、子を持つというのは本当に不思議なものです。

出産前には、「数時間ごとにおっぱいをあげて、おむつを替えて、泣いたら抱っこしてあやしてというのを、昼夜関係なく24時間、毎日休みなく続けるなんて大丈夫だろうか・・・」と弱気に思ったりもしたのですが、傍から見れば、自分の時間ももてない、苦労の塊に他ならないそんな毎日が、今はとても嬉しい、幸せな毎日に感じられてしまうのです。

そんなことを改めて考えてみると、私にとって親になるというのは、自分の意外な一面に気付かされる経験でもあり、また、そのなかで育まれていく親と子のつながりというものも、本当に不思議なものだなと、最近つくづく実感させられながら毎日を送っています。

親と子の関係、神の「子」

今日、読んでいただいた聖書ですが、このお話もまた、親と子のつながりにゆかりのある箇所の一つです。

ここは、私たち人間と神とのかかわりがどういうものであるのかについて綴られているのですが、聖書は、私たち人間を「神の子」、神の子どもであると伝えています。さらに、６節のところを見ると、人はただ「神の子ども」というだけではなくて、神を「アッバ、父よ」と呼ぶことができる、そういう神とのかかわりのなかにおかれているのだというのです。

「アッバ、父よ」の「アッバ」という言葉、これは、イエス・キリスト自身が、神のことをそう呼んでいた言葉だと言われています。イエスが使っていた言葉、アラム語という言葉では、「アッバ」というのは、ちょうど「パパ」とか「お父さん」というような、子どもが父親を慕って呼ぶときの呼び方です。

つまり、聖書は、人と神とのかかわりというのは、子どもが父親を「パパ、お父さん」と愛着をもって呼ぶような、そんな親しみのあるあたたかな親子のつながりのようなものなのだと伝えているのです。

私たちをとりまく人間関係には、いろいろな関係があります。親と子の関係というのはその一つですが、他にも、先生と生徒、先輩と後輩、友人同士などいろいろあるわけです。「神と人」とのかかわりというと、人が神から信仰について学び、その信仰生活のなかで養いを得ていくことを思えば、どちらかというと、先生と生徒、師匠と弟子というようなイメージがつきやすいようにも思います。

しかし聖書は、あくまでも「父と子」、「親と子」のかかわりのなかに、神と人との関係を見ているのです。そして、私自身が親となった今、この聖書の視点というのがとても興味深いことに感じられてならないのです。なぜ聖書は、親と子の関係のなかに、神と人との姿を重ね合わせて見ているのだろうか、と思うのです。

信じるということ

普通、キリスト教を信じて「信仰をもって生きる」というと、私たちが聖書のすべて、神のすべてがよく分かるようになって、固い決意や、確固たる強い信念をもって生きていくようなイメージがあります。でも、実は、そうではないのです。そうではなくて、聖書は、「信じる」ということ、信仰をもって生きるようになるということは、ちょうど今日の聖書の箇所にあるように、それはまるで、幼い子どもが「パパ、お父さん」と呼んで無邪気に親を慕い、親は無条件で我が子を愛し、慈しむ。そんな親と子の姿のようなものだというのです。

これは、どういうことかといえば、信仰をもつ、信じるようになるということは、物事をよく知らない無知であった私たちが、十分な知識や知恵を得て、またその成果も発揮して一人前になるということではないということです。ちょうど子どもが成長して大人になっても、親は親で、子は子という関係はなくならないように、信じるようになった後も「子」であることには変わりないのです。そして、子であるからこそ、本当に苦しい時、さびしい時には、親を慕う幼な子のようになって、いつでも神に素直に祈ることができる。それが、信仰をもって生きることであり、神を信じて生きることなのだということです。

私たちの理解や意志の深さ、思いや情熱の強さではないのです。そうではなくて、神が、まるで親が子を愛するように人を愛し、一人ひとりのありのままの姿を受け入れ、愛してくれている。そんな私たちの命を支えてくれている大きな存在があるということです。そして、そうやって私のこの命も今、神から愛され、受け入れられているのだということを、聖書は伝えているのです。

愛されているということ

息子が生まれて間もなくの、まだ私自身が赤ちゃんのお世話にあまり慣れていなかったころ、よく悩まされ、参ったことがいくつかありました。その一つが、赤ちゃんが夜やっと寝てくれたと思ったら、また起きてしまい、おむつを替えようとしたら、おむつを替えているそばからまた、汚してしまうということでした。それで夜中に、赤ちゃんの服、自分の服、シーツも何もかも総取り替えしなくてはならないわけです。ただでさえ慣れない育児で疲れていたところに、追い打ちをかけられるかのような事態に、心底げんなりしたものでした。もちろんイライラを感じたりすることもあるのですが、でも、これは本当に不思議なことなのですが、そんな時でさえ、やっぱり子どもを愛しいと感じるし、なんだかんだ言ってせっせとお世話をしてしまうのです。

そんなことを子育ての合間、合間に、考えたりしていると、「ああ、私もこうやって親に無条件でありのままを受け入れられ、愛されて、育ててもらったのだな」と改めて実感させられたりします。ただ、そんな私ももう親元を離れてしまっているのですが、しかしそれでもなお、「神」という存在が、子を思う親のように、今この時も、私のこの小さな命を愛し、ありのままに、大切に受け止めてくれているという今日のこの聖書のメッセージが、心に深く響いてくるように思われてならないのです。

まとめ

我が子は本当に愛しいもので、これからも大切に育てていきたいと思うのですが、残念ながら親というのは、子どもとずっと一緒にいられるわけではありません。普通は、親は子どもよりも先に世を去らなくてはなりませんし、また、精神的な意味でも、ちょうど私自身が親から自立していく時期があったように、私の子どももまた、私のもとから自立して、自分の足で歩いていく日がいつか来るのだと思います。そんなことを思うと、生きるということは、最終的には、独りで自分の足で歩いていかなくてはならないわけです。ある意味では、生きていく上で孤独な部分が、いつもついてくるものなのかもしれません。

でも、生きていくなかでどうしようもない孤独や不安を感じる時、今日の聖書の言葉を思い出すことができたらと思うのです。目には見えないかもしれないけれど、大きな存在がいつも、私という小さな命を大切に見守っていてくれているのです。そして、小さな子どもが、親を信頼して安心してすくすくと育っていくように、私たちもまた、ありのままの自分として生きていくことが許されているのだという、そんな聖書のメッセージを、人生の大切なときに思い出すことができたら。そうやって私自身も、目の前に与えられている人生を、これからも一歩一歩、歩いていくことができたら、と思っています。

２０１２年７月10日　今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録